

安全論議の前提条件

牧野 昇*

Prerequisites for Discussing Safety Noboru MAKINO

人間の欲求は、経済社会の発達とともに変化していくものである。マズローがとなえる欲求段階説によると、衣食住の生理的な基本欲求を卒業すると、次の段階で「安全に対する欲求」に関心が移るといふ。アメリカ人のセキュリティ費用は1人当たり200ドルにのぼり、発展途上国の全生活費をはるかに上廻るといふ事実からも、高度経済社会における安全欲求への強い関心がうかがわれる。

技術の優劣を測定する場合、かつては、「経済効率」が中心であり、インプットとアウトプットの比率を高めることに全力投球した。しかし、現在の技術は、安全、防災、環境保全などが、効率と同じレベルに位置づけられるようになった。時代は変わってきている。

ここ数年の間に、安全あるいはセキュリティに関する論議が急激にクローズアップされてきた。ここで安全論議の基本として考えなければならない前提条件を4点あげてみたい。

第1は「選択可能か否か」によって安全基準が変えられるべきであるという認識である。たとえば、航空機旅行を選ぶ、あるいはオートバイに乗るといふことは自分自身の選択が可能である。しかし、原子力発電所の設置は個人の意思では選べない。嫌なら立ち退かなければならない。当然、前者の安全基準よりも後者の安全基準の方がきびしくなければならない。

第2は「欲求の肥大化」への対応である。安全に関する技術進歩よりも、安全欲求の方がはるかに変化のスピードが大きい。交通事故は年々減少しているが、事故への非難はきびしくなる一方だ。SO_xやNO_xのガス濃度は次第に低下していつているのに空気汚染についての苦情件数は年毎に著増している。たとえば、都庁前の硫黄酸化物の濃度は0.054 PPM (1969年) から、0.023 PPM (1972年) に減っているが、大気汚染苦情件数はその期間に3倍近く増加している。欲求は加速的な伝播性をもち、相乗的に肥大化していく。欲求を満足させる努力は必要であるが、これに振り廻されての迎合は禁物である。

第3は「トレードオフの存在」を認識することである。あちらを立てれば、こちらが立たずという関係を明確にしなければならない。排ガス規制の強化は望ましいが、それがもたらすマイナスのインパクトの認識を意識的に後退させてはならない。エネルギー消費の少ない生産プロセスを採用すれば歩留りは悪くなり、安全をトコトンまで確保すれば、コストは必然的に上昇する。とくに重要なのはある限界以上になると、それ以上のニーズに対応するためにはコストが指数函数的に上昇してくるといふ一般的法則を無視してはならないことである。

第4は「安全業務の社会的評価」の問題である。安全を維持するには、日頃のメンテナンスが必要である。国の防衛には自衛隊員、鉄道事故防止には保線従業員、工場災害防止には保守要員、さらに警察官から守衛に至るまで、安全とかセキュリティを維持するためには、メンテナンスという縁の下で支える役割の人々が必要である。メンテナンスとは、変化のないということ点を点検する作業である。人間は変化に生きがいを感じ、常に新しいものへの挑戦に働きがいをもつ。したがって、メンテナンスの仕事に対する社会的評価は低い。ここにどのような形で生きがいを与えていくか、検討を要する問題である。

以上、安全問題を論じるうえで考慮してもらいたい4つの点をあげた。そこで共通している問題は、安全とは技術的対応で解決しうる範囲をこえているということである。

* (株)三菱総合研究所 専務取締役